

リスクを冷静に伝えるために—— 苦い経験を踏まえた 欧州での リスクコミュニケーション

これまで食べてきたものにリスクがあると分かった場合、関係者はどのようにそれを消費者に伝えればよいのだろうか。イギリスから広まったBSE問題など、欧州では新たなリスクの問題にたびたび悩まされてきた。過去の経験を踏まえ、いたずらに消費者の不安をあおらないために行政や事業者はどのような取り組みをしてきたのか。最近の事例を交ぜながら、欧州でのリスクコミュニケーションの取り組みをお伝えしたい。



シュトゥットガルト大学
環境技術社会学科
リサーチ・フェロー
東京大学農学部非常勤講師
西澤 真理子氏

プロフィール

上智大学外国語学部卒業後、製品安全コンサルタントなどを経て、インペリアルカレッジ・ロンドンにてサイエンスコミュニケーションにて博士号。ドイツ政府招へい研究員、シュトゥットガルト大学社会学部プロジェクトリーダーなど、10年の欧州での研究生活を経て帰国。現在、リスク政策とリスクコミュニケーションについて審議会の委員を務めるほか、雑誌での連載や著書が多数ある。

科学の解明と検出技術の精度向上がもたらした、欧州の動揺

欧州では10年ほど前に、ポテトチップや揚げ物に含まれるアクリルアミドが発がん物質だと分かり、とりわけスウェーデンや周辺各国で大きな騒ぎとなった。対応が難しかった点は、これは意図しない、製造時の副産物であり、また、これまでわれわれが普通に食べてきたものであること。科学の解明が進み、検出技術の精度が高まったことで、今まで分からなかったことが分かるようになったために問題となった物質だったからだ。

どう対応すればよいのか。それまでの経験が少な

かった欧州は大きく動揺した。

「われわれが普通に食べているさまざまな食品にもリスクがありますよ」「油ものに偏った食生活をしないようにしてください。バランスよい食生活が大切です」。

リスクを過大視するメディアに正確な情報を伝え、不安に思う消費者に「安心してください」というメッセージを欧州のリスク評価機関が中心となって送った。それでも初期の対応の遅さがあり、問題が鎮静化するまでに数年がかかった。

社会に対して、分かりやすいメッセージを、迅速に送ること

近年、主にアミノ酸液を使用している食品(しょうゆやソース)に含まれる3-MCPDという物質も、やはり製造過程で生成する副産物として注目されてきている。エコナに含まれていた「グリシドール脂肪酸エステル(以下「GE」)」も同様に、検出技術の向上によりドイツで発見されたものだ。

しかし、この問題への欧州の対応は、アクリルアミドのときとは明らかに違う。不安が不安をあおってしまった苦い経験を生かし、行政や事業者は社会に対して適時に、そして分かりやすいメッセージを送ることで迅速に対応している。リスクコミュニケーションの進化が功をなしているといえるだろう。

合理的に、達成可能な限り、できるだけ低く——ALARA

ドイツでの例を挙げよう。ドイツのリスク評価機関であるBfRは、乳児用の粉ミルクに含まれるグリシドール脂肪酸エステルのリスクについて、製造企業に対し、できるだけ低減してください、との意見書を昨年3月に出した。それには、専門用語では「アララ(ALARA-As Low As Reasonably Achievable)」という「合理的に達成可能な限りできるだけ低く」という注釈がついていた。BfRの意見を受け、事業者は行政や研究機関と一緒に、いまだに科学的に解明されない側面を持つこの物質の研究を行ない、一方で、製品に含まれる物質の低減措置を進めているのが現状である。

この「アララ」という用語は少々の説明が必要だろう。

まず、アララでいわれるこの「合理的」とはどのようなことなのか？ これは、費用、時間、労力などを考慮し、バランスを取った上で、ということ。そもそもアララという考え方は、そのリスクが本当にリスクとなるかもまだよく分からないときに、「念のために」対応しましょう、というリスク管理の考え方である。

これはいわゆるプリコーション(precaution)と呼ばれる。プリコーションは、原因と結果の因果関係が明らかでない場合の「予防(prevention)」とは違うことに注意が必要だ。アララは「因果関係がはっきりしないので、念のためにできる範囲で対策を取りましょう」、事業者は「自助努力してください」ということだ。

「社会混乱を引き起こさない」リスクコミュニケーション

GEに当てはめれば、リスクの程度もまだよく分からないことが多いけれども、念のためにできることはやっておきましょう、自主的取り組みで製造者は混入量を削減してください、ということになる。実際にドイツでは事業者に対する自主的取り組みの推奨にとどまっておらず、この物質の規制は、ドイツでも、EU全体にもない。

粉ミルクは乳幼児にとっては大切な栄養源。だから、「GEが含まれていても、乳児用ミルクはこれまで通り

乳児に与えるようにしてください」と、BfRは心配する親に向けたメッセージも同時に出した。無用な社会混乱を引き起こさないように配慮したリスクコミュニケーションである。

新たに分かったリスクについては冷静に対応し、過剰な不安をあおらないために分かりやすくリスクを伝える。それが数多くの苦い経験を踏まえた欧州での、リスクコミュニケーションの大きな柱となっている。